

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23500745

研究課題名(和文)新オリンピック文化創出の可能性：ユースオリンピックと本大会の接続性に関する研究

研究課題名(英文)The possibility for the creation of new Olympic culture: The conjunction of the Youth Olympic Games and the Olympic Games

研究代表者

舩本 直文(MASUMOTO, Naofumi)

首都大学東京・人間健康科学研究科・教授

研究者番号：70145663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：YOGが志向する若者の関心喚起、ジェンダー・ミックス及び団体種目のOGへの導入、開会式におけるコーチの宣誓のOGへの導入など、YOGで試行した後、その効果を確認してOGへと取り入れていく傾向が確認された。一方、平和と環境運動においては、YOGにおいて平和と環境メッセージの希薄化傾向が窺え、今後の課題となることが示唆された。YOGのCEPでは、参加者によるアウトリーチ・プログラム不足が顕著であり、OGへと反映される方向性は確認できなかった。CEPが“Learn & Share”へと名前を変えたように、YOGに参加したアスリート達が自国で成果を普及・伝達することが今後の課題であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：It was affirmed that there were tendencies that the many Youth Olympic Games systems which were aimed by YOG for the arousal of interest of young generation, gender-mixed and team events, and the oath of coach were introduced into the Olympic Games after the confirmation of those system's effectiveness. On the other hands, in the peace and environment programs of YOG, because there was the glimpse of the rarefaction of peace and ecological messages, it was suggested that these tendencies will turn to the future tasks. In the Culture and Education Programs of YOG, there was no direction of reflection to the OG, because of the lack of the out-reach programs by the YOG participants. Moreover, according to the name change of CEP to “Learn & Share,” it was suggested that there is a future task that the YOG athletes should permeate and transmit their experiences to their generations in their home countries.

研究分野：オリンピック研究、スポーツ哲学

 キーワード：ユース・オリンピック大会 オリンピック大会 2012年ロンドン大会 2014年ソチ冬季大会 2014年南
 京YOG大会 2016年リレハンメルYOG大会 オリンピック教育 オリンピック平和運動

1. 研究開始当初の背景

近代オリンピック競技大会復興から115年経過し、現在のオリンピック競技大会(Olympic Games: OG)はその肥大化、商業主義化、メダル志向の勝利至上主義化、ドーピング違反や用具の不平等問題など様々な問題を抱えている。しかし、OGのもつ平和思想と教育思想という高邁な思想であるオリンピズムへの支持を得て、またマスメディアやスポンサーの経済的思惑や世界各国の政治的思惑も含めて存続してきたといえる。このようなOGの文化的・社会的・経済的・政治的な研究は多く積み上げられてきている(J・パリール他(2008)オリンピックのすべて、大修館書店、V・Girginov(2010) The Olympics: Critical Reader.他)。

このような問題を少しでも再考し、オリンピック思想の原点に立ち返ろうとして2010年にはシンガポールで第1回のユース・オリンピック競技大会(Youth Olympic Games: YOG)がIOCの主導によって開催された。2012年2月にはインスブルックで初のYOG冬季大会も開催されている。このYOGの目的は、スポーツ離れしている若者達にスポーツの価値を再考させ、反ドーピング教育や環境問題、世界の異文化理解と交流を促進することであった(IOC website)。また、第1回シンガポールYOGの特徴は、全世界の205のNOCから14-18歳の若者3,600人を一堂に集め、競技のみならず文化と教育プログラム(Culture and Education Program: CEP)を全員に課したことである。このCEPの目的は、オリンピックの価値を体験的・包括的に理解することであり、オリンピズム・スキル向上・健康なライフスタイル・社会的責任・表現力という5テーマのもとに、チャンピオンとの対話・発見活動・世界文化・コミュニティ・島冒険旅行・探検活動の7つのカテゴリーの50プログラムが実施された。このような新しいオリンピック文化創造への試みは大いに評価されなければならない。しかし、YOGのOGへの波及効果はまだ未着手の研究領域であることも事実である。

競技プログラム面では、若者の関心が高い3on3の導入や大陸別チーム編成など新しいオリンピックの競技スタイルを模索した試みが行われている。このようなYOGにおける新しいオリンピックの姿を模索する試みがOG自体の変容を来すような波及効果を生みことが予想され、さらにYOGとOGの様々な類似したイベントやシステム間の相互作用や波及効果も予想される。(YOGとOGの類似イベントを比較すると、両大会の相異だけでなく相互作用や波及効果の可能性が示唆されている。)また、これまでの研究代表者のオリンピック教育および平和運動に関する研究実績が、本研究に裨益すること大であった。

2. 研究の目的

YOGが掲げているスポーツ競技と文化・教育の融合およびオリンピックの価値や異文化理解の促進という目的とOGの本大会が掲げているスポーツを通じた心身の調和のとれた全人教育と平和な世界の構築への寄与という目的の接続性について、実際のYOG大会とOG大会を調査研究し、新しいオリンピック文化創造の可能性について検証することである。なかでも、YOGとOGの競技プログラムの相互作用効果、教育・文化プログラムと平和運動に焦点を当て、その接続性を明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

(1)調査対象の大会:本研究の研究期間(2011年4月~2015年3月)に開催予定のYOGとOGの4大会を調査対象として、競技プログラムの相互関係、文化プログラムおよび教育プログラム(CEP)、平和運動に焦点を当てて相互関係や波及効果について実態調査を行う。さらに、既に終了したシンガポールYOGを基点とするために当大会についても結果報告書などの調査・分析を行う。

(2)資料収集の対象と方法:YOG、OG各大会に関する資料と情報は以下のような方法で入手し、分析・解釈する。YOG、OG各大会の招致計画書、IOCの評価報告書、各大会の実施計画書の入手(website 渉猟)、オリンピックシンポジウム、IOCオリンピック文化・教育会議、IOCオリンピック環境会議など国際会議における情報収集(発表情報および関係者インタビュー調査:専門的知識の提供含む)、YOG、OG各大会の関係者からの資料入手・情報収集(インタビュー調査:専門的知識の提供含む)、YOG、OG各大会の組織委員会のwebsite情報の分析・解釈、YOG、OG各大会の関連国際会議やプリ大会での情報収集、YOG、OG各大会の開催期間中における現地情報収集(聖火リレー、開会式や一般CEPを含む)。

4. 研究成果

(1)2011年度は以下のような研究を行った。2010年シンガポールYOGの報告書およびIOCのデータを元に、2010-2016の間に開催されるYOG、OGの4大会の全般的な計画概要を調査分析した。特に、2010年シンガポールYOGの分析結果は、平和運動の不十分さと参加者のアウトリーチ・プログラム不足の現実を明らかにした。2012年1月に開催されたYOGインスブルック冬季大会の事前調査および期間中の現地調査を主として行った。YOGの平和・教育プログラムおよびCEP情報等の入手・分析を行った結果、両プログラムの効果と限界が明らかにされた。特にCEPでは環境や平和運動への取り組みの不十分性が示唆された。また、日本チームの事前準備教育不足の課題が浮き彫りにされた。2012年ロンドン大会(OG)の事前資料収集と分析

を行ったが、国際聖火リレーの中止に見るような平和運動の不十分さと YOG の CEP 等の新規プログラムとの効果的な連携については未だ連携の途上にあると言わざるを得なかった。OGI というオリンピックの影響要因の指標化によって、YOG および OG のポジティブなレガシーとネガティブなインパクトの研究も実施されているが、YOG でのレガシー研究の遅れが示唆された。

(2) 2012 年度は以下のような研究を行った。

2012 年インスブルック冬季 YOG 大会のデータ分析・まとめ、波及効果追跡研究を行った。

2012 年ロンドン OG 大会の事前調査・現地調査・データ分析を行った。2014 年ソチ冬季 OG 大会の前年度として、事前資料の収集・分析を行った。2012 年インスブルック冬季 YOG 大会の研究成果を国内外の国際オリンピックシンポジウムで公表した。2012 年「IOC オリンピックと文化・教育会議」に参加して、YOG・OG の情報収集を行った。YOG の特徴である教育・文化プログラムの有効性とユニークな競技方式から YOG を通じたトランスナショナルな方向性について明らかにし、本大会 OG への敷衍の重要性について言及した。

(3) 2013 年度は以下のような研究を行った。

主に 2012 年ロンドン OG の特徴の取り纏め、中でもオリンピック教育と平和運動に焦点を当てて取り纏めると共に、2012 年ロンドン OG のまとめと波及効果追跡研究を行った。

2014 年ソチ冬季 OG の資料収集分析・事前調査・現地調査を行い、資料を分析した。

2014 年南京 YOG の前年度として、オリンピック教育と平和運動に関する事前資料の収集・分析を行った。2012 年ロンドン OG の研究成果を取り纏め、精神文化側面のオリンピック・レガシーの不十分性に関して国内・国際学会で公表した。2014 年ソチ冬季 OG 後のウクライナ問題などに関して情報を収集した。

(4) 2014 年度は以下のような研究を行った。

2014 年ソチ冬季 OG における新種目導入の原理と方向性の分析、2014 年南京 YOG における CEP と平和運動の現地情報収集、2016 年リレハンメル冬季 YOG の新種目導入の原理と方向性の確認、IOC の Olympic Agenda 2020 の改革案に見る改革の方向性の確認、2012 年ロンドン OG における変化の方向性の確認。

以上のような 4 年間の分析・解釈から、YOG が志向する若者の関心喚起、ジェンダー・ミックスおよび団体種目の OG への導入、開会式におけるコーチの宣誓の OG への導入など、YOG で試行した後、その効果を確認して OG へと取り入れていく傾向が確認された。一方平和と環境運動においては、YOG において平和・環境メッセージの希薄化傾向が窺え、IOC

の今後の課題となることが示唆された。YOG の CEP については、参加者によるアウトリーチ・プログラム不足が顕著であり、OG へと反映されていく方向性は確認できなかった。CEP が“Lear & Share”へと名前を変えたように、YOG に参加したアスリート達が自国に帰国後に成果を普及・伝達することが今後の課題となってきたことが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

舛本直文・本間恵子(2014)無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化・体育・スポーツ哲学研究, 36-2:97-107. (査読有)

Keiko Homma and Naofumi Masumoto (2013). A Theoretical approach for the Olympic legacy study focusing on sustainable sport legacy. The International Journal of the History of Sport., Vol.30, Issue12: 1455-1471. DOI:10.1080/09523367.2013.825251 (査読有)

舛本直文 (2013). YOG の新方向の目指す方向: IWWYOG の参加報告書との関連分析. 体育哲学研究, 第 43 号: 35-39 (査読無).

Naofumi Masumoto (2012). The Legacy of the Olympic Peace Education of the 1964 Tokyo Olympic Games in Japan. The International Journal of the History of Sport, pp. 1-18 | DOI: 10.1080/09523367.2012.692247 (査読有)

Naofumi Masumoto (2012). The Peace Movement on the Occasion of the 21ST Century Olympic Games: Developments and Limitations. Sport, Ethics and Philosophy, Journal of the British Philosophy of Sport Association. Volume 6, Issue 2 pp. 123-137 | DOI: 10.1080/17511321.2012.666992 (査読有)

Naofumi Masumoto (2012). Youth Olympic Games: A New Paradigm in the Quest for Transnationalism. In J. Forsyth, and M.K. Heine (eds.) Problems, Possibilities, Promising Practices: Critical Dialogues on the Olympic and Paralympic Games. Eleventh International Symposium for Olympic Research. International Centre for Olympic Studies, The University of Western Ontario. pp. 35-39. (査読無)

舛本直文 (2011). 2010 年第 1 回ユース・オリンピック競技大会 (YOG) における平和運動. 体育哲学研究, 第 41 号: 19-22, (査読無).

[学会発表](計 21 件)

舛本直文 (企画・司会・報告). 2014 年南京 YOG の総括と展望. JOA コロキウム第 150 回記念特別コロキウム「学習院女子大学 (東京)」. 2015.1.24

Naofumi Masumoto. Where have all Olympic Truce Walls gone? The 2014 12th International Olympic Symposium. (International Centre for Olympic Studies, University of Western Ontario, London, Ontario, (Canada)). 2014.10.31.

Naofumi Masumoto. Round Table II: Olympic Idea and its Implication in Agenda 2020 Panelist. 3rd International Symposium for Olympic Research: The Olympic Idea Quo Vadis? (Mainz University(German)). 2014.9.8.

舛本直文. オリンピック・インパクト研究 (OGI) の現状と課題. 体育哲学専門領域シンポジウム B「オリンピック・レガシー研究の現状と課題」. 日本体育学会第 65 回大会「岩手大学 (盛岡)」. 2014.8.28.

舛本直文. オリンピック休戦の壁 Olympic Truce Wall のレガシーとしての機能: どこにサインは消えたか? 日本体育学会体育哲学専門領域夏期合宿研究会「青雲荘 (箱根強羅)」. 2014.7.20.

舛本直文. 2012 年ロンドンオリンピック・パラリンピック大会時のオリンピック教育: オリンピック・レガシーの視点から. 日本スポーツ教育学会第 33 回大会. 「日本大学 (世田谷区)」. 2013.10.19.

Keiko Homma and Naofumi Masumoto. Comparison between positivism and constructivism approaches for developing sport legacy of the Olympic Games: A case of the Sydney 2000 Olympic Games. 41th Annual Conference of the International Association for the Philosophy of Sport (IAPS 2013) (CALSTATE Fullerton LA (USA)). 2013.9.6.

Naofumi Masumoto. Intangible Legacies: what is the mind aspect of the Olympic culture? 41th Annual Conference of the International Association for the Philosophy of Sport (IAPS 2013) (CALSTATE Fullerton LA (USA)). 2013.9.5.

舛本直文. 無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化. 日本体育学会第 64 回大会「立命館大学びわこ草津キャンパス (滋賀県)」. 2013.8.29.

舛本直文. 2012 年ロンドンオリンピック・パラリンピック大会におけるオリンピック休戦活動. 日本体育学会体育哲学専門領域夏期合宿研究会「青雲荘 (箱根強羅)」. 2013.7.15.

Naofumi Masumoto. Insufficiency of the Youth Olympic Games as the peace movement. 2012 International Conference on the Philosophy of Sport, ((National Taiwan Normal University (Taipei, Taiwan)). 2012.12.23.

Homma, Keiko, and Naofumi Masumoto. How Social Factors Have Developed Sport Legacy after the Sydney 2000 Olympic Games. The 11th International Symposium for Olympic Research. (International Centre for Olympic Studies, University of Western Ontario, London (Canada)). 2012.10.20.

Naofumi Masumoto. Youth Olympic Games: A new paradigm in the quest for transnationalism. The 11th International Symposium for Olympic Research. (International Centre for Olympic Studies, University of Western Ontario, London (Canada)). 2012.10.19.

Naofumi Masumoto. Youth Olympic Games: A new paradigm in the quest for transnationalism. 2012 スポーツ哲学研究セミナー「NYC (東京、代々木)」. 2012.9.29.

Naofumi Masumoto. Axiology of the Olympism: Quest for the inclusion of 'peace' as one of the Olympic Values. 40th Annual Conference of the International Association for the Philosophy of Sport (IAPS 2012) (Porto University (Portugal)). 2012.9.13.

舛本直文. オリンピックの価値論: なぜ「平和」はオリンピック価値に含まれないのか. 日本体育学会第 63 回大会「東海大学 (秦野市)」. 2012.8.24.

舛本直文. YOG の新方式の目指す方向: 参加報告書との関連分析. 日本体育学会体育哲学専門分科会夏期合宿研究会「青雲荘 (箱根強羅)」. 2012.7.16.

舛本直文. ユース・オリンピック大会 (YOG): トランスナショナリズム希求のニュー・パラダイム. 日本スポーツ社会学会第 21 回大会「熊本大学 (熊本市)」. 2012.3.19.

Naofumi Masumoto. Educational significance of the CEP of the Singapore 2010 Youth Olympic Games. 4th International Sport Business Symposium. (Innsbruck University (Austria)). 2012.1.12.

舛本直文・大津克哉. 2010 年シンガポール・ユースオリンピック大会 CEP の教育的意義. 第 31 回日本スポーツ教育学会「神戸大学 (神戸市)」. 2011.11.12.

21 舛本直文. YOG の DNA: 2010 年シンガポ

ールYOGから2012年インスブルックWYOG
へ。日本体育学会体育哲学専門分科会夏
期合宿研究会「青雲荘(箱根強羅)」。
2011.7.17.

〔図書〕(計 6件)

舛本直文(監修)(2014)オリンピック・
パラリンピックと人権。公財人権教育啓
発推進センター。Pp.18.

舛本直文(監修)(2014)写真で見るオリ
ンピック大百科別巻パラリンピック。ポ
プラ社, Pp.55.

舛本直文(監修)(2013)。写真で見るオリ
ンピック大百科(全5巻)。ポプラ社,
全275頁

舛本直文(2012)。古代オリンピックと近
代オリンピック復興の歴史。日本体育協
会・日本オリンピック委員会100年
誌。pp.80-99.

舛本直文(2012)。映画とスポーツ。In
井上俊・菊幸一(編著)よくわかるスポ
ーツ文化論。ミネルヴァ書房,
pp.128-129.

舛本直文(2011)。オリンピック競技大会。
ブリタニカ国際大百科事典(on line 版)。
ブリタニカ・オンライン・ジャパン, web
page 84頁(48,923字)。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.comp.tmu.ac.jp/sport/personal/masumoto/masumoto.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

舛本 直文(MASUMOTO, Naofumi)

首都大学東京・人間健康科学研究科・教授
研究者番号:70145663